

地域における子育て支援ボランティア養成講座のあり方に関する一考察
～諫早市子育て支援サポーター養成講座を事例に～

Study on Community Based Childcare Volunteers Training Program
～ Case Study of Childcare Supporters Training Program Sponsored by Isahaya City ～

菅 原 良 子

Yoshiko Sugawara

入 江 詩 子

Tomoko Irie

長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要

10巻1号

Bulletin of the Research Institute of Regional Area Study

Nagasaki Wesleyan University

2012年3月

地域における子育て支援ボランティア養成講座のあり方に関する一考察*

～諫早市子育て支援サポーター養成講座を事例に～

菅原良子**、入江詩子**

Study on Community Based Childcare Volunteers Training Program

～ Case Study of Childcare Supporters Training Program Sponsored by Isahaya City ～

Yoshiko Sugawara, Tomoko Irie

要約

本稿では、長崎ウエスレヤン大学が地元の諫早市から委託を受け2004年度から実施している「子育て支援サポーター養成講座」について、講座の開催の経緯、各年度の講座のねらいと内容の変遷の検討を通して、地域における子育て支援とその担い手の養成のあり方について考察した。

キーワード

子育て支援 ボランティア 参加型学習 体験型講座

はじめに

本稿は、長崎ウエスレヤン大学が地元の諫早市から委託を受け2004年度から実施している「子育て支援サポーター養成講座」の検討を通して、地域における子育て支援とその担い手の養成のあり方について考察しようとするものである。

「子育て支援」という言葉は、1980年代後半から、政策用語として少子化対策の一環として取り入れられてきた¹。その後、1994年に策定されたエンゼルプラン以降広く一般化したものの、その定義は一定しておらず多様な内容を含んでいるといえよう²。『子育て支援用語集』では、狭義の定義として、「家庭の機能を補完的に支援すること」として捉えられるが、広義には「家庭をとりまくさまざまな社会資源が、両親や家庭が持っている子育て機能をより有効に働かせ、促進できる環境を整えていくこと」であると定義し、子育て支援とは「子どもや親が本来持っている自ら育つ力を発揮できる環境を保障することにほかならない」としている。

以上のように狭義から広義まで幅広い概念を含む「子育て支援」の名のもとに、多様な活動が行われてきているが、その一つに子育て支援の担い

手、特にボランティアの養成をどのようにするかという課題も含まれよう。

本論文では、諫早市子育て支援サポーター養成講座を事例に、地域における子育て支援ボランティア養成のあり方について考察をこころみてみたい。同講座は、子どもや子育てをめぐる環境が大きく変化し、家庭や地域における子育て・子育ての機能が低下し、親の子育ての負担や不安が増大する中で、地域において子どもや子どもを支える親への支援に関わる担い手の養成をねらいとして開催されてきた。そして子育て支援に関わる市民のボランティア活動や地域活動の活性化をも同時に目指してきた。

以下では、そのねらいと講座の概要について述べた後にこの講座の成果と課題を検討したい³。

1. 諫早市子育て支援サポーター養成講座開催の経緯

①諫早市における地域福祉計画の策定とモデル市町村としてのとりくみ

旧諫早市⁴は、地域福祉の推進をめざし、2003（平成15）年7月に、「全ての市民一人ひとりがその尊厳を保持され、住みなれた地域で安心して暮らしながら、生涯を通じ健やかで自立した生活を送るとともに、地域社会の一員としてあらゆる社会活動に参加することができる地域（まち）づくり」を基本理念とする地域福祉計画「いさはや健康と福祉のまちづくりプラン」を策定した。そして2004（平成16）年には厚生労働省から「子育て支援総合推進モデル市町村」としての指定を受け、地域福祉計画の具体的実践が取り組まれることとなった。「子育て支援総合推進モデル市町村」とは、2003（平成15）年7月に成立した「次世代育成支援対策推進法」に策定が定められている市町村の行動計画において、子育て支援事業に総合的・

* Received March 15, 2012

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

積極的に取り組もうとする市町村をモデル市町村とし、全国的な子育て支援事業の推進に資することを目的としたものである。全国で49の市町村が指定され、長崎県では佐世保市と旧諫早市が指定を受けた。

諫早市ではこのモデル市町村の主要事業として二つの事業が行われた。一つは地域福祉に対する市民の共通認識・意思統一を図るための「諫早市子育て支援セミナー」の開催、もう一つが、本稿が対象とする「諫早市子育て支援サポーター養成講座」の開催であった。

② 諫早市子育て支援サポーター養成講座の開催と諫早市における講座の位置付け

「諫早市子育て支援サポーター養成講座」は、地域の子育て支援の担い手を育成するために、諫早市と地元の大学である長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所が連携して、2004（平成16）年度に初めて開催した講座である。その後も内容や開講形態を少しずつ変えて、2011（平成23）年度まで毎年おこなってきた。

2005（平成17）年3月1日に1市5町が合併し新諫早市となったその翌月の4月には、国の「次世代育成支援対策推進法」にもとづき「子育て・子育て応援」のための基本指針となる「いさはや子育て応援プラン（諫早市次世代育成支援行動計画）」（前期計画：2005年度～2009年度）が策定された。このプランでは、次世代育成支援の基本的視点として、①子ども自身への支援～すべての子どもの尊重と子育ての支援～、②親（家庭）への支援～すべての家庭への支援、親育ちの視点からの支援～、③地域力の再生～社会全体による子育て、子育ての支援～という3つの視点をあげ、めざす目標像を「市民総参加で創る『ささえ愛の子育て・子育て応援都市』いさはや」としている。2005（平成17）年度以降の「諫早市子育て支援サポーター養成講座」はその一環として開催されてきた。諫早市はその後、2010（平成22）年4月に「いさはや子育て応援プラン（諫早市次世代育成支援行動計画）」（後期計画：2010年度～2014年度）

を策定、その中の基本目標4「市民と行政がともに子育てを支えるまちづくり」「地域全体で子育てを支えるために」の中の「子育てボランティアの養成・組織づくりと活動の推進」における事業の一つとして「諫早市子育て支援サポーター養成講座」が位置づけられ、現在まで至っている。

2. 諫早市子育て支援サポーター養成講座のねらい

すでに述べたとおり、諫早市子育て支援サポーター養成講座は諫早市と長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所の協働による企画・運営のもと、2004（平成16）年度から毎年実施されてきた。この講座は、少子化や核家族化の進行、地域社会の変化にともない、子どもや子育てをめぐる環境が大きく変化し、家庭や地域における子育て・子育ての機能が低下し、親の子育ての負担や不安が増大する中で、地域において子どもや子どもを支える親への支援に関わる担い手、いわば子育て支援に関わる地域の「サポーター」の養成をねらいとして開催された。さらに詳しくいうならば、地域福祉や子育て支援に関する知識を楽しみながら修得する機会を提供し、地域の福祉活動参加希望者や、経験者の人材発掘・育成を行い、子育て支援に係る市民のボランティア活動や地域活動の活性化をねらったものであった。

この講座は、2004（平成16）年度から2011（平成23）年度までの8年間にわたり、内容や形態を少しずつ変えて実施してきた。筆者の入江は講座開講当初から、菅原は2年目の2005年度からこの講座に関わり、2006年度からは2人が中心となり、諫早市の担当者と協議しながら、この講座のコーディネートを行ってきた。

以下では、その講座のねらいと講座の内容を検討する中で、講座の成果と課題について考察したい。

3. 講座の概要

以下では、既に終了している2004年度から2010年度までの7年間の講座の概要を、講座の内容と形態の特徴をふまえて3期に分けて述べてみたい。

表1：2004（平成16）年度講座内容

2004年度 (平成16年度)	開講式	基調講演「子育て支援とまちづくり」 中野伸彦（本学教員）
	第1回	「地域福祉の役割と地域リーダーの動向について」 佐藤快信（本学教員）
	第2回	「子育てのニーズを支援につなぐ方法」 入江詩子（本学教員）
	第3回	「地域版『福祉テキスト』づくりの意義と方法」 中野伸彦（本学教員）
	閉講式	

(1) 講座開催初期～大人数講義型・講演型～
(2004年度・2005年度)

①2004（平成16）年度の講座概要と受講者の感想
2005（平成17）年3月の新諫早市誕生前に行われたこの講座は、旧諫早市民だけでなく5町の町民も含めて受講者の募集を行った。講座には176名という多くの市民に参加していただいた。

2004年度の講座は、講座の最初と終わりに開講式と閉講式が開催され、講座は3回シリーズで行われた。3回の講座は、多くの受講者が参加できるよう、各講座、同じ内容を別の日にも開講し、2～3回のリピート開講形式をとり、受講日も受講者が選択できるようにした。

講座の内容は、表1の通りである。第1回・第2回の講座は若干のワークを入れながらの講義型で進められ、第3回は実際に新聞をつくるというワークショップ形式で行われた。

②2005（平成17）年度の講座概要

2005年度は、前年度の取組みと目的を受け継ぎつつ、合併して新しくスタートした諫早市の地域づくりのため、市民が主役の子育て支援のあり方について参加者が共に考え、具体的な行動につなげることを目的として開催された。

講演と事例発表からなる1日の講座として開催し、約150名の方が参加された（表2参照）。

表2：2005（平成17）年度講座内容

2005年度 (平成17年度)	<p>①講演</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子育て支援と子どもの権利について」 子どもの人権アクション長崎 理事 中村則子 氏 ・「地域のネットワークを活かした子育て支援」 緊急サポートネットワーク事業アドバイザー 山本有子 氏 <p>②事例発表 “活動を通してみえるもの”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子育てサークルを通してみえるもの」 諫早子育てネットワーク「げんき」代表 志波さゆり 氏 ・「子ども達の登校見守りを通してみえるもの」 真津山地区民生委員児童委員協議会会長 平 重好 氏 ・「森山地域のまつりを通してみえるもの」 元森山東小PTA会長 中山靖彦 氏 <p>③意見交換 コーディネーター：入江詩子（本学教員）</p>
--------------------	---

(2) 参加型少人数講座の導入と受講生ネットワーク構築の試み～(2006年度～2007年度)

①2006（平成18）年度の講座概要

2006年度の講座は、地域子育て支援に関する知識と方法を楽しみながら習得できるよう、内容や形態を考えるとともに、「地域の子育て支援サポーターリーダー」の養成、「子育てに関わる次世代の育成」を目的として開催した。そのため、これまでも一部に取り入れていた受講生参加型形式を講座全体に取り入れることとし、受講生の人数を少なくして、講座全体をワークショップ形式の参加型講座として企画した。参加対象も今までより広げ、子育て支援および地域活動に関心のある高校生、大学生にも講座への参加をよびかけた。

また、初めての試みとして、講座の開催に先立ち10月にこれまでの受講生に呼びかけ、講座の事前説明会と懇談会も開催した。

具体的な講座内容は表3の通りである。第1回目から第3回目まではワークショップ形式で、第

4回目は受講生以外にも参加者を呼びかけ、講演会形式で行った。

最初の2回の講座では、「子育て支援サポートとは」、「子どもをとりまく課題と対応策」について、グループワークを通して考えるとともに、3回目の講座では「自分たちが地域でできること」について考え、具体的な企画案を作成した。第4回目の講演会では、その企画案を受講生が発表する機会を設けた。

最初の3回の講座には約30名の方からの申し込みがあり、受講生以外にも公開した第4回の講演会には約60名の方の参加があった。

②2007（平成19）年度の講座概要

2007年度は、前半には昨年度の受講生の方にご協力いただいて今年度の講座の企画のアイデアを出していただくための講座を開催した他、昨年度の講座で作成した2つの「私たちが地域でできる子育て支援」企画の実現に向けた取り組みも行っ

表 3：2006（平成18）年度講座内容

2006年度 (平成18年度)	第1回	「子育てをめぐる問題について考える～メンバーを知る、ミッションを考える～」 入江詩子（本学教員）
	第2回	「地域の子育て課題と解決策について ～地域の子育て支援ニーズマップをつくろう～」 中野伸彦（本学教員）
	第3回	「子育て支援プロジェクトの立案・発表 ～子育て支援プロジェクト企画をつくろう～」 菅原良子（本学教員）
	第4回 (公開講演会)	「子育て支援プロジェクト発表～かたらんね！ いさはやの子育て支援～」 発表 諫早市子育て支援モデル地区実践発表（真津山地区・小栗地区・高来地区） 諫早市子育て支援サポーター養成講座受講生 子育て支援プロジェクト発表 講演「現代の子育て事情について」 ペイ・ヨンジュン（本学教員）

た。これは、毎年開催される講座の受講生のOB会としての役割を果たすとともに、実際に地域での子育て支援活動の企画・運営を担うための「諫早市子育て支援サポーターの会」のような組織の結成をねらいとして行ったものである。

また毎年行っているサポーター養成講座については、この年から、「地域の頼れるおじちゃん・おばちゃんを目指して!!」をサブテーマとして掲げ、「小さなことでもできることから子育て支援の活動を始めよう」というねらいをより明確にした。

◎昨年度の受講生を対象にした講座

表4のように、昨年度の受講生を対象として、昨年度の講座のふりかえりと今年度の講座についての懇談会、昨年度の講座で企画した「私たちが地域でできる子育て支援」企画（「子育て中のママのホット空間」「地域参加型！子育て情報マップ」）の実現に向けた話し合いを内容とした2回の講座を開催した。

表 4：2007（平成19）年度講座内容 1：昨年度受講生を対象にした講座

2006年度受 講生を対象 にした講座	①懇談会「今後の活動についての打ち合わせと今年度講座開催に向けて」 進行：入江詩子・菅原良子（本学教員）
	②「子育て支援サポーター養成講座の企画をつくろう！」 進行：入江詩子・菅原良子（本学教員）

この講座を受けて実際に、遊び場グループ「ちょっと一息、親子のホット空間」と、子育てマップづくりグループ「地域参加型！子育て情報マップ」の二つのグループが昨年度の受講生と本学の学生により結成され、企画の具体化と準備の話し合いがもたれ、実際に活動が行われた。

遊び場グループ「ちょっと一息、親子のホット空間」は、保護者に対して、気分転換や安らぎの場、子どもを安心して遊ばせることのできる場、相談・出会いの場を提供することを目的として、

つみき・ブロック、絵本、ねんど遊びなど子どもたちが遊べるコーナー、お昼寝・授乳コーナー、保健師による相談コーナーなどを設けて、子どもと保護者が「ホットとできる」空間を提供するというイベントを2回実施した。このイベントは土曜日の午後に行われ、会場は、本学が諫早市と連携して運営している諫早市の商店街の中にある生涯学習スペース（アエルいさはや2階 まちづくり生涯学習室）を利用した。両日とも約20組の親子にいらしていただき、好評であった。



もう一つの子育てマップづくりグループは、子育てを地域で支援するためには地域住民が子どもたちの情報を共有することが必要であると考え、本学の地元である諫早市栄田町自治会・子ども会等の協力を得て、マップづくりを通して子どもたちと地域の大人の関わりを築くための「地域参加型！子育て支援情報マップ」の作成にとりくんだ。

地区の子ども（小学生まで）、その保護者、自治会、講座受講生、本学学生が5つのグループに分かれ、それぞれ分担した地区内を探索し、通学路

や遊び場などの気になる情報をデジカメで撮影した。それを白地図に描きこみ、後日、写真の貼りつけと色つけなどの作業を行い、地図として完成させた。完成したマップは、子育て支援サポーター養成講座の中で地元自治会に贈呈がなされ、地域に配布された。

以上の二つの活動は、長崎県の「長崎っ子を育む行動指針モデル事業」（2007年度）に採択され、その事業の一環として行われた。



©2007（平成19）年度の「子育て支援サポーター養成講座」

2007年度の講座も4回シリーズとして、3回の講座と最後の公開講演会という内容で実施した（表5参照）。

3回の講座のうち、2回は、子どもや子どもを育てる親が抱えている問題とその背景（第1回）、地域での子どもと大人の関わりについての現状と求められる子育て支援、地域力を育てていくための具体的とりくみ（第3回）についての講義が行われた。また第2回目には、昨年度の受講生向けの講座で出された「自分たちの頃の子どもの状況や環境が変わり子育ての方法も変わっているの

で、実際にどうなっているのかを知りたい」という意見をもとに、子育て支援センターでの見学・実習を取り入れた。

第4回講座となる公開講演会では、昨年度受講生に「ちょっと一息、親子のホッと空間」と「地域参加型！子育て支援情報マップ」の活動について報告をしていただくとともに、臨床心理士であり「NP（＝Nobody's Perfect）プログラム」の日本への導入など地域での子育て支援活動を行っている講師を外部から招き講演会を行った。

2007年度の講座には63名の受講者が登録し、第4回目の公開講演会には約300名の参加があった。

表5：2007（平成19）年度講座内容2：子育て支援サポーター養成講座

2007年度 (平成19年度)	第1回	「子どもの現状と子育て支援サポーターの役割」 第一部「子どもの現状と家族の課題」 入江詩子（本学教員） 第二部「企画の実践から得たこと」 発表：昨年度受講生
	第2回	「諫早市内子育て支援センターフィールドワーク」
	第3回	「地域で子どもが育つ意義と仕組みづくり」 第一部「地域の子育て力と子どもの社会力」 菅原良子（本学教員） 第二部「地域力を育てるには」 中野伸彦（本学教員）
	第4回 (公開講演会)	「地域の一員として子育て支援にできること」 活動報告 諫早市子育て支援サポーター養成講座報告（昨年度受講生からの実践報告） 講演「子ども一人育てるには村じゅうの人が必要」 三沢直子 氏（コミュニティカウンセリングセンター代表）

(3) 参加型少人数講座の定着 (2008年度～)

①2008 (平成20) 年度の講座概要

2008年度の講座も、昨年度と同様に「地域の頼れるおじちゃん・おばちゃんを目指して!!」をサブテーマとし、4回の講座を実施した。この年も現在何らかの子育て支援活動をされている方のほか、これから活動を始めたいと思っている方など子育て支援活動に関心を持っている方に参加を呼びかけ、地域において、何らかの子育て支援活動を小さなことでも自分ができることから始められるサポーターを増やすことをねらいとした。

表6にあるように、これまでの講座では4回の講座を行う場合、4回目の講座を受講生以外の方にも参加を呼びかける講演会形式にしてきたが、2008年度の講座では第1回目の講座を講演会形式にして、2回目以降の講座への参加を呼びかける

という形にした。また、昨年度好評だった子育て支援センターへのフィールドワークを行うとともに、他の2回の講座ではワークショップを中心とした参加型の講座にした。第2回目は、現在子育て中の親が実際に抱えている悩みを事例としてサポーターとしてどのように対応するかについてグループで考え、第4回目の講座では、諫早市の子育て支援施設としてオープン間近の諫早市こどもの城の方にファシリテーターとしていらしていただき、これまでの3回の講座のふりかえりや子育て支援の活動をするにあたっての視点について、頭と体を使ったワークとミニ講義を交えた講座を実施した。

この年以降以上のような形での参加型講座の形式が定着した。

表6：2008 (平成20) 年度講座内容2：子育て支援サポーター養成講座

2008年度 (平成20年度)	第1回 (公開講演会)	「描画にあらわれた子どものこころの問題と発達停滞」 三沢直子氏 (コミュニティカウンセリングセンター代表)
	第2回	「体験しながら学ぶ子育て支援」 入江詩子・菅原良子 (本学教員)
	第3回	「諫早市内子育て支援センターフィールドワーク」
	第4回	「できることから始めよう！子育て支援の第一歩」 池田尚氏 (諫早市こどもの城準備室長)

②2009 (平成21) 年度の講座概要

2009年度はこれまでの講座をふまえるとともに実際に子育て支援活動を行うときに役立つスキルを身に付けることもねらいとして、講座内容を企画した。これまでと同様4回の連続講座とし、昨年度までの参加型形式を踏襲しつつ、実際に活動に関わっていくうえでスキルとして必要なコミュニケーションをテーマとして、傾聴のスキルや価値観の多様性、アサーティブネスについての講座とワークを実施するとともに(第2回)、実際に子育て支援の最前線に立たれている保育士の方の話を聞く機会や子育て支援の活動現場でのリスクマネジメントとして子どもの病気や事故があった時

の対応方法について学ぶ時間(第3回)も取り入れた。また、諫早市における子育て支援の施設や活動状況について話を聞く時間も設けた(第1回)。

最後の第4回については、宮崎市でNPO法人をたちあげ、子育て支援センターや児童館の運営、「NP (=Nobody's Perfect) プログラム」などの親支援講座や支援者向けの研修などの活動を行っている方を講師としてその活動内容や思いを話していただくとともに、講師を交えた受講生同士の活動紹介などを通して、実際にどのように子育て支援活動に関わっていくのか、活動における悩みの共有や情報交換を行った。

具体的な講座の内容は表7の通りである。

表7：2009 (平成21) 年度講座内容

2009年度 (平成21年度)	第1回	「子育て支援の必要性」 入江詩子・菅原良子 (本学教員)
	第2回	「親支援に必要なコミュニケーションスキル」 入江詩子・菅原良子 (本学教員)
	第3回	「子ども支援に必要な知識とスキル」 田島美代子氏 (太陽保育所)・諫早消防署職員
	第4回	「子育て支援の第一歩」 第一部 「みんなで子育てする地域社会へ！NPOの取り組み」 原田和代氏 (NPO法人ドロップインセンター副理事長) 第二部 懇談会

③2010（平成22）年度の講座概要

2010年度は基本的に前年度の講座内容と参加型の講座形式を踏襲しつつ、前年度実施しなかった子育て支援センターへの見学を復活させた。また、表8の講座とは別に、親支援に関わる子育て支援ボランティアを養成し、諸機関と連携してその

組織化を図ることを目的として、子育て支援センター職員や保育士、これまでの子育て支援サポーター養成講座受講者を対象に、外部から講師を招いて実施した、「NP（＝Nobody's Perfect）プログラムファシリテーター養成校講座」の運営も行った。

表8：2010（平成22）年度講座内容

2010年度 (平成22年度)	第1回	「子育て支援の必要性」 「諫早市における子育て支援の状況」	入江詩子・菅原良子（本学教員） 諫早市児童福祉課
	第2回	「子育て支援に必要なコミュニケーション」	池田尚氏（諫早市こどもの城館長）
	第3回	「諫早市内子育て支援センター訪問」	
	第4回※	「子育てまちづくりをめざして」	講師：原田和代氏（エンパワメントみやざき事務局長）

4. 諫早市子育て支援サポーター養成講座の成果と課題

以上、3期にわけて、2004（平成16）年度から2010（平成22）年度までの講座ねらいと内容をふりかえってみた。第1期の講座開催初期（2004・2005年度）には、大人数講義型・講演型での開催形態がとられ、受講生が学びやすくするためにリピート開講形式や、一部グループワークを取り入れるなど工夫をしてきた。また、2006年度以降は受講するだけでなく、受講後は実際に地域で活動に関わっていただけるように、特に地域における子育て支援活動の核となるリーダーの養成を目的として、講義型の講座ではなく受講生が主体的に関われる講座とするべく、受講生の人数を絞り、体験・参加型の手法をとりいれながら講座を実施してきた。その導入期が2006・2007年度である。

この導入期には、2006年度において、受講生が実際に地域で活動できる企画を立案し、その翌年の2007年度に実際に企画を実行するというスタイルをとった。ねらいとしては、この企画を実行したメンバーが中心となって、毎年開催される講座の受講生のOB会のような会を結成し、実際に地域で子育て支援活動の企画・運営を担うための「諫早市子育て支援サポーターの会」のようなものが結成できればという思いがあったのだが実現には至らなかった。その理由としては、受講生の負担が大きかったことが考えられる。2つの講座の企画・実施に当たっては、企画の準備において何度も打ち合わせを行うこととなった。特に遊び場グループ「ちょっと一息、親子のホッと空間」の実施にあたっては打ち合わせ回数が多く、その準備における受講生の負担も大きかった。また、この

企画に関わった受講生の中には、既に地域で子育て支援活動に関わっているメンバーも多く、単発のとりくみであれば何とかなったものの継続することは難しい状況であった。また受講生の意識としても、講座に参加するのはいいが自分が中心になって活動するのは抵抗があるという意識が大きかったと思われる。以上のような状況の中で、受講生が中心となって受講生のOB会、つまり「諫早市子育て支援サポーターの会」を結成することは難しかったと考えられる。

以上をふまえて、2008年度からはこれまでの少人数型・参加型講座形式を踏襲しつつ、子育て支援活動に関わるうえで必要な子育て支援に関する考え方とより具体的なスキルを学べるように、実際に地域で子育て支援活動に取り組んでいる方や保育所の方を講師として招いたり、コミュニケーションスキルの内容を取り入れたたり、グループワークを多用してより参加度を高め、受講生が発言する機会を多くつくり、交流できるようにするなどの工夫を行ってきた。また、受講生とボランティアの場としての子育て支援センターをつなぐべく、子育て支援センターへの訪問を講座の内容に取り入れるとともに、諫早市に依頼してボランティア登録の仕組みをつくっていただいた。このことにより、受講者の中には子育て支援センターへのボランティア活動に参加されるようになった方もいらした。

この講座の成果と課題を考える上で、受講生の感想をいくつか掲載しておく。

（以下抜粋、原文ママ）

- ・自分が子育てをすることへの不安が軽減した。自分に声をかける勇気があって、人に頼

ることへの抵抗感さえ失くせば、身近に、たくさんステキな先輩がいることを知った。同じテーマに関心を持つ人同士のつながりができて本当に楽しかった。もっと仲間が増えたらいいなと思った。

(2006年度講座第1回感想)

- ・熱心な活動報告に、今後も子育て支援サポーターが増えていくことを期待します。講演会は、素晴らしい内容で、NPプログラムも大変興味深く、今後の勉強材料をいただきました。社会環境の変化が及ぼす影響がこんなにも大きいとは思いませんでした。是非ファシリテータープログラムに参加し、地域に関わっていききたい。(2007年度第4回感想)
- ・グループ作りからはじまって、共通点をみつけるために、話しあえたのはリラックスできて、和やかな雰囲気になれてよかったです。一方的に講義を聴くのではなく、事例を基にして自分の考えをだしあうというのはよかったと思います。(2008年度第2回感想)
- ・タイの子どもと日本の子供の描く絵を見て、なぜ日本の子供は生活感のない、潤いのない絵を描くのだろうかと思いました。親の生活が忙しく子供と触れ合う時間がない、テレビやゲームに毒されている。原因は一つではないが、せめて食事を一緒にして、子どもと触れ合う時間を多くとることが必要だと感じた。(2009年度第1回感想)
- ・子育て支援サポーター養成講座に参加して様々な地域や人達に出会い、今有る現状やこれからやろうとされていることを知り、自分がそれに関わることができた面をとても嬉しく思っています。実際に子供や孫を始め、その他の子供さんや親ごさんに少しでも生かすことができたと思います。

(2009年度全4回の講座を終えての感想)

また、2011年3月には2004年度から2010年度までの受講生に対して、講座がどのように役にたっているのか、実際に地域でどのような子育て支援活動に関わっておられるかについてのアンケートを実施した。このアンケートについては別稿⁵でふれているのでここでは詳しくとりあげないが、このアンケートからは「受講してよかったこと」「受講してよくなかったこと」として以下のような声が聞かれた。

＜受講してよかったこと＞（上位4点）

- ・受講生同士楽しく交流できた。
- ・最近の子育ての事情がわかった。
- ・子育て支援の必要性を理解した。
- ・諫早市の子育て支援の現状がわかった。

＜受講してよくなかったこと＞

- ・内容の趣旨がつかめなかった。
- ・支援センターなので、子育て支援の看板を掲げていても実際により支援をやっていないところもある。
- ・活動や行事などの支援がほとんどだったこと。もっと心の支援があると思って参加したのでとても残念だった。
- ・意見発表などもあったが、いまいちどのような子育てサポーターを目標しているのかよくわからなかった。

以上のことから、諫早市子育て支援サポーター養成講座の成果として以下の3点があげられるように思う。

- ①グループワークを中心とした参加型の講座により、受講生各自が積極的に発言する機会をつくることができ、他者と交流する力の向上がみられた。
- ②学びながら参加者同士が交流を深めることにより多くの刺激を受け、自分で活動を始めた受講生や、既存の活動に積極的に関わり始めた受講生もいた。
- ③新しい講座の内容について主体的・積極的に考えるなど、受講生の学びの意欲の向上がみられた。

上記のことは、講座の形式を少人数の参加型にして、グループワークを数多くとり入れたことの成果と言えるであろう。

しかしながら、「受講してよくなかったこと」で、「内容の主旨がつかめなかった」「どのような子育てサポーターをめざしているのかよくわからなかった」とあるように、こちらの主旨が十分に伝わっていなかったことや受講者のニーズに沿った講座ができなかったという点は反省点である。これについては、受講生が、子育て支援活動にこれから関わろうとしている人や既に地域で活動している人など受講生の層が多様であったため、それぞれの層のニーズに合わせた講座内容にできていなかったということも考えられる。

また、この講座は、自分ができるところから地域

で実際に子育て支援活動に関わるサポーターの養成をねらいとしていたが、ボランティアをしたいという声は多く聞かれたものの、実際のボランティア活動とむすびつけるしくみづくりやサポーターのネットワークづくりという点では課題が残った。このことは大学と行政の役割分担と連携をどのような形でおこなっていくかに関わる問題であると思われる。

おわりに

以上、本学が諫早市から委託を受け2004年度から実施してきた「諫早市子育て支援サポーター養成講座」のねらいと講座の概要を3期にわけて整理するとともに、講座の成果と課題について考察を行った。

「はじめに」において述べたように、「子育て支援」は多様な概念を含む言葉であり、「子育て支援」に対するイメージも多様である。中には「子育て支援」は「親を甘やかす」などといった「子育て支援」に対して批判的な声も聞かれる⁶。実際に子育て支援サポーター養成講座の中でも、子育てを終えた受講者から「私たちの時にはこのような支援が無かったから、今の人たちは恵まれている」、「今の親は自己中心的なのではないか」といった内容の意見も出された。確かにこのような面は否定できないであろう。しかしながら、たとえば昔と比べて支援が多く行われていたとしても、核家族化がすすみ、地域のつながりが衰退している中で、子育ての孤立がすすみ、子育てに不安を感じる親が増えていることも現実である。そのうえ経済格差が進んでいる現状ではなおさら子育てが困難な時代になっているといえるであろう。このような社会状況の中、子どもがより良い環境で心も体も豊かに成長できるように、子育て・親育ちを支援し、その環境を整えていく「子育て支援」は必要であり、子育てを社会で支えていくという視点が重要である。親が自分と子どもを受け入れ子育てを楽しめるような支援が必要であり、そのためには悩みや困ったことがあったら頼ったり相談したりなど、地域において子育てを支えあう関係づくりが必要であるといえよう。「諫早市子育て支援サポーター養成講座」はその関係づくりの試みであったといえる。受講者へのアンケート調査では、「子育て支援の必要性を理解した」「最近の子育て事情がわかった」という声が聞かれ、さらには実際に活動に関わり始める受講生もいらっしゃるなど一定の成果を見ることが出来た。しか

しながら、意欲がありながら活動に結び付けられなかった受講生もあり、その点におけるしくみづくりやネットワークづくりにおいては課題が残った。この講座は2011年度で一区切りを迎え、2012年度からは新しい形でスタートする予定であるが、地域が基盤となり身近な関係の中で支え合えるしくみづくりとその担い手の養成は今後ますます重要になってくるとと思われる。

註

- ¹ 増山均『子育て支援のフィロソフィア』（自治体研究社、2009年）85ページ
- ² 山内昭道監修、太田光洋ほか編著『子育て支援用語集』（同文書院、2005年）4ページ。
以下の「子育て支援」の定義については同書を参照した。
- ³ 講座のねらいと概要についての詳しい内容は、『平成21年度 諫早市子育て支援サポーター養成講座報告書』（長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所、平成23年3月）を参照。
- ⁴ 後に述べるように、2005（平成17）年3月1日に諫早市・多良見町・森山町・飯盛町・高来町・小長井町の1市5町が合併して新「諫早市」となる。本稿では、合併前の諫早市を旧諫早市としている。
- ⁵ 入江詩子・菅原良子「地域における子育て支援ボランティア養成の課題」（『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第10巻1号、2012年3月）
- ⁶ 例えば、大日向雅美『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』岩波書店、2005年

参考文献・資料

- ・『平成21年度 諫早市子育て支援サポーター養成講座報告書』長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所、平成23年3月
- ・前原寛『子育て支援の危機』創成社、2008年
- ・杉山千佳『はじめよう！子育て支援・次世代育成支援』日本評論社、2009年
- ・北野幸子・立石宏昭編著『子育て支援のすすめ』ミネルヴァ書房、2006年
- ・増山均『子育て支援のフィロソフィア』自治体研究社、2009年
- ・大日向雅美『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』岩波書店、2005年
- ・山内昭道監修・太田光洋ほか編著『子育て支援用語集』同文書院、2005年

